
ゼロの使い魔は3番目

BLOOD

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔は3番目

【Zノード】

N1412M

【作者名】

BLOOD

【あらすじ】

ネギまーの本編終了5年後にネギと友達になつたフェイトが学園の見回りをしていると、突然鏡のような魔法陣が現れ使い魔として呼ばれてしまう…！

プロローグ（前書き）

はじめまして作者のローランド・ゼークホーです。なにぶん処女作になりますので至らぬところが山ほどある點文になつてしまつてがどうぞ長々見てやってください。

プロローグ1

ネギま！本編終了5年後・・・

フェイント side

ああ、相変わらず甘いな、ネギ君は、5年前は僕に友達になりたいとか言つてきたし、今だつて学園を襲撃してきた鬼に負けたガンドルとかいう魔法先生庇つて怪我してるし、ああもうしょうがない、「ネギ君下がつて、ヴィシュタル・リシュタル・ヴァンゲイト 小さき王ハツ足の蜥蜴 邪眼の主よ 時を奪う毒の吐息を 石の息吹！」

鬼を霧が包み、そこにはひとつの中像が出来上がつていた。フェイントは石像を殴り、石像を粉々にした。

「ネギ君、大丈夫かい？鬼は還したけど、怪我はどうだい？」

「うん。大丈夫、さつき治癒の魔法かけたからもう治つたよ。」

「全く、少しほは考へてくれ、魔法先生が危ないのはわかるけどね、魔法の射手でも撃てばいいのに、わざわざ、間に入つて庇つて怪我を負うなんて、間抜けもいいところだよ。」

フェイントはやれやれといつた風にため息をつく。

「ムツ、仕方

ないじやんか氣づいたら体が勝手に動いてたんだからさ。」

「ネギ君。君は相変わらず頭はいいのにバカだね、戦況判断が随分ヘタクソになつたじやないか、一度ハイディライトウォーカーに、修行をつけ直してもらつたらどうだい？」

その言葉を聞き、ネギは先ほどまでのイラつきもすっかり消え、「マスター・修行・オシオキ・ヤダ・オシオキコワイオシオキコワイ・・・・・・」

といった具合に壊れてしまった。

フェイトはもう一度やれやれとため息をつき、壊れてしまったネギを正気に戻し、負傷したガンドルを連れて、学園長室に報告に向かつた。

～～～現在の設定～～～

フェイトが学園に居るのは5年前の魔法世界の事件でネギに友達になつて欲しいと言われ、却下したあと、ネギにガチバトルで負け、グランドグレートマスターキーを奪われ、コードオブザライフメイカーの野望が崩れ、勝者の権利を使われ友達になつたため。

その後流石に信用がないため、マギスティルマギとして行動（実際にはフェイトが趣味でやつていたことと大差無い）し信用を得て学園に来たのが1年前の事である。

ちなみにアラアルバとは和解しており、学園長とタカミチと仲が良い、だが魔法先生・生徒とは仲が悪いのだが、佐倉愛衣などのガンドルや高音のように強く正義正義と言わないような人には、最近になつてからだが認識を改められている。フェイトはネギ同様学園では、先生をしており、教科は倫理である。

またネギ同様人気がありネギとフェイトは二人の子ども先生として有名であり、学園女子生徒の8割がどちらか又は両方のファンクラブに入っている。

ついでにネギとフェイトの容姿は5年前に年齢詐称薬を使った姿とほぼ同じである。

さらに調等のフェイトの従者達は、魔法世界の魔法学術国家都市アリアドネーで委員長やコレット達と仲良く戦乙女騎士最優秀候補として学んでいます。

プロローグ1（後書き）

今回はゼロ魔のゼの字も出てきませんでしたが次話には召喚されるところまでいくつもりです。駄文ですがよろしくお願ひいたします。

プロローグ2（前書き）

戦闘難しい。文才欲しい。

プロローグ2

side introduce

翌日。フェイトはいつも通り5時と早くに起床し、身形を整え授業に必要なものを確認して家を出る。家と言つても教員寮なのだが、そして朝早くから開いている喫茶店に入り、朝食を摂る。もちろん日に七杯は飲む珈琲もだ。ちなみに珈琲と紅茶のどちらがより良い飲み物かでネギと皮肉や珈琲の有用性について口論になつたことは少なくない、周りの人は、いつも冷静なフェイトがムキになつているのが可愛いと言つていたが、アラアルバの人達はいつ喧嘩になるかひやひやしていた。事実、エヴァの別荘では周りが止められない程の喧嘩になつたこともあり、ネギはマギアエレベア、フェイトは冥府の石柱や障壁突破石の槍など致死性の高い物ばかり使っていたのでアラアルバにとつて一人の珈琲・紅茶議論は鬼門である。それはさておきフェイトは朝食を終えると職員室までまっすぐ向かい、授業まで書類整理・処理を珈琲を飲みつつ行い、授業になれば真面目で淡々とだが、生徒の興味を引くような話題を織り込んだ、真面目だけど面白い授業を行つている。そんな先生の模範みたいな彼は今晚ネギと見回りをすることになつていて。

どうやらこの頃の鬼達はそこそこ強力で魔法先生も今までツーマンセルだったのだがいまではスリーマンセルになつていて。（まあ、アラアルバは補助以外の人は1人なのだが。）

昨夜ネギが負傷したのも鬼が持つっていた武器に障壁突破がかけてあつたからからである。あと疑問に思つたかも知れないがフェイトがネギと組んでいるのは、もしフェイトが裏切つても取り抑えられる実力を持つた人材がネギしかいないからである。平たく言えばネギは監視である。が、アラアルバの中にそれを気にしている人はいない。全ては正義正義と五月蠅い一部の魔法先生・生徒への配慮で、

実際神多羅木等は気にしていない。

introduce out

フェイント side

ネギ君とは教員寮の前で待ち合わせをしている。待ち合わせ時間は10時ちょうど。今は9時40分。ネギ君は今日残業も何も無いはずだから、多分9時50分位に・・・って言つてる間に来たね。

「フェイント～、ごめん待つた？」

「いや、少し早めに来ただけだからね、そこまでは待っていないよ。

「じゃあ少し早いけど行こ。」

「わかった。」

僕はこの時早く行くことを後になつて、悔いとは思わなかつたよ。いや想像の範疇外だつたから仕方ないんだけど。

・・・・・

・・・・・

・・・・・

ふー。なんで僕とネギ君はこんなのに会つてゐるんだろう、しかし、関西呪術協会の反対派も必死だね。わざわざ上級の鬼を50体も出すなんて、これアラアルバ以外の魔法先生・生徒じゃあ話にすらなら無いね。

まあ、僕たちには関係無いけれど。

「フェイント！行くよ！！ ラス・テル・マ・スキル・マギスティル 契約に従い、我に従え、高殿の王。来れ、巨神を滅ぼす燃え立

つ雷霆。百重千重と重なりて、走れよ稻妻『千の雷』。固定・掌握・・・術式兵装『雷天大壯』！！』ネギ君もそれなりに本気だね。まあマギアエレベアまで使つてるから僕は補助でもするべきかな。

「よし、ヴィシュ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト 小さき王ハツ足の蜥蜴 邪眼の主よ その光我が手に宿し 災いなる眼差して射よ 石化の邪眼！！」

フェイトの指先から閃光が放たれ、鬼達が当たつた場所から徐々に石化しはじめる。

だが鬼達は、

「兄ちゃん、舐めんなや、こんぐらいレジスト出来るわ！」と余裕綽々と言つた風に笑う。だが、フェイトは淡々と全く焦らずに言つ。

「それはそうさ、君たちは一応上級の鬼だからね、そんなことは重々承知さ。だから、僕がしたのはただの補助さ。」

フェイトはさも当然といった風だ。それを理解出来ず鬼達は首を捻る。

そこにフェイトは、

「だから、石化してれば碎きやすいだろ、ネギ君が。」

死刑宣告を下した。

瞬間。鬼達が知覚できない程の速さで、鬼達の間を雷が走つた・・・

鬼達は全員雷に碎かれ還つた。

フェイトはネギに声をかける。

お疲れさ・・・・・。」

フェイトはいきなり現れた鏡のような魔法陣に引きずり込まれ、フェイト・アーヴェルンクスは旧世界・魔法世界両方から姿を消した。

「ネギ君。

ネギ side

『雷天大壯』で一気に片付けようとしたときに、閃光が放たれた。これはフェイトの『石化の邪眼』だ。

そして鬼達を見ると、皆腹から、胸辺りが石化し始めていた。流石フェイト。いつも効率の良い補助をするね。フェイトのしたい事がわかつた僕は、フェイトの期待通り、石化している部分を片つ端から砕いた。

そして周りに鬼がないことを確かめてから、『雷天大壯』を解きフェイトに振り向いた、すると、『ネギ君。お疲れさ……。』

光の鏡に消えていくフェイトの姿が見えた。

「フェイトッ！！！」

叫んで手を伸ばすが、届かずに虚しく空を切った……。

フェイト side

光の鏡に引きずり込まれて、気がついた時目に入つて来た光景は、如何にも魔法使いですといったような服装をした人達と、広大な草原と青空だった。

そこにある人達は、「平民を召喚した！？」だの、「流石ゼロのルイズ。」などと言つていて、その中でも、一番近くにいた鮮やかなピンクの髪の少女が近付いてきて、

「あんた、誰？」
と不遜に問つて來た。

プロローグ2（後書き）

やつとゼロ魔の世界に入つて行きます。ギリギリでルイズが出てきました。次話から本格的に、ゼロ魔の世界です。と行きたいですが、フェイトが消えた後のネギ達の行動を書きますのでちょっとだけネギまーの世界に戻ります。まあまあな駄文になりそうですが、長い目で見てやってください。

四、惑つネギワールド（前書き）

すいません。今回はフェイトが消えた後のネギ達の話なので、ゼロ魔成分が全くないです。次話からはゼロ魔の話しづづかりですので、ゼロ魔好きのかたすいません。

四 感づネギワールド

「ネギま！世界」
side introduce

フェイトが突然消えたことをネギは学園長に報告して来ていた。「

学園長先生ッ！！！」

学園長はネギが荒々しく扉を開けて入って来たので、学園長は驚いたが、フェイトがいないことに気付き、最悪を想定してネギの報告を聞いた。

「フォツフォツフォツ、どうしたのかね、ネギ君。」「学園長先生、フェイトがフェイトが、フェイトが消えました！！」

学園長はフェイトが裏切り、姿を消したのかと思ったが、それにしてもネギ君に心配の色が濃いと気付き、「・・・詳しく話を聞こうかの。」

そういっていた。

・
・
・
・
・
・

「なるほどね。」

ネギの報告にあつたのは、上級の鬼達を倒したこと、フェイトが全く違う魔法体系の魔法陣に引きずり込まれたこと、フェイトも突然のことに驚いていたことだった。

学園長は少し考え、

「う、ネギ君、フェイト君は確かアラアルバのバッジを持ってい

たのう。」

「はい。フェイトが学園に来た時渡しましたから。それに、フェイトは一部の魔法先生が五月蠅いからと、いつも持ち歩いていました。」

「ならば、彼女らを呼ぶか。」

学園長は携帯を取り出し、エヴァにかけた。

「おー、エヴァンジエリンちょっとといいかのう。」

「なんだクソジジイ、私は忙しいんだぞ、大した用じゃなかつたら、その奇っ怪な頭を通常になるまで凹ますぞ。」

「いや、それがな・・・・・・とこうわけなのじや。」

「何？あのガキがか？なるほど、私は茶々丸と行けば良いわけだな？」

「相変わらず察しがいいのう、エヴァ、そうしてくれ。後の子らは、わしが呼ぶでのう。なるべく早く来てくれ。」

・・・・・

・

「あのフェイトが消えたって本当何ですか？ 学園長先生！――！」「本当なん？ お爺ちゃん。」「本当何ですか？ 学園長先生。」

「にわかには、信じがたいでうござるなー。あのフェイト殿が。」「フェイトが消えるとは信じがたいアルね。」

「あわわわわわ。大変ですー。」

「あのフェイトさんがですか、驚きですね。」

「あのフェイトちゃんがねー、そんなことつてあるんだ。意外だなー、完璧超人って感じなのに。」

「確かに意外だね、フェイトって、ネギ君と同クラスなんでしょう？」

「ああ、あのラカンのおっさんが警戒するぐらいだからな、かなり

強いはずだ。」

「意外です～。」

「ええ、確かに強さはネギ先生クラスですし、普段の警戒もアラアルバの中で一番高いですから、かなり意外でしょう。」

「ふん、所詮はガキだつたか、それとも、その魔方陣の気配を感じとれぬようになつていたかのどちらかだらうがな。」

「後者だと思いますよ師匠、あの魔方陣は魔法体系が全く違つたらか発動の探知が出来ませんでしたから。」

上から明日奈、このか、刹那、楓、古、のどか、ゆえ、パル、朝倉、千雨、さよ、茶々丸、エヴァ、ネギである。

「それでじや、フェイト君が消えた。というとこりから空間転移系の魔法だと考えたのじや、では探索頼むぞ。茶々丸君。」

「はい。改良されたアラアルババッジは衛星を介して地球上又は魔法世界上にいれば、探索可能です。それでは、search

start · · · · · そ、そんなバカなことは · · · · ·

茶々丸は探索結果に驚愕している。

「ど、どうしたんですか？ 茶々丸さん。」 ネギは驚いている茶々丸に心配そうに問いかける。

「すいません。ネギ先生。探索結果は · · unknown。フェイトさんは地球上はあるか、魔法世界上にも存在していません。」

「な、なんですって！？」 茶々丸の回答に責ざめるネギ。

「う、嘘ツ、ていうか、魔法世界に衛星ないから魔法世界は探しようないじやん。」

余りの結果に無意識に、抜け道を示そうとする明日奈。

「いいえ、明日奈さん。魔法世界には超が転送してきた大規模攻撃型衛星が存在します。ですから魔法世界も探知可能です。」

抜け道もないと否定する茶々丸。

「で、でしたら魔法空間はどうなのでですか？ そこなら衛星でも探査不可では？」 更なる抜け道を示すゆえだが、

「いえ、その可能性も考え先程同時探査いたしましたが、魔法空間

の存在又は作成の際に出来る空間の歪みが探索時、発見されなかつ

たかめの「おとぎ話」は、この「おとぎ話」が、この「おとぎ話」の「おとぎ話」である。

「じゃ、・・・じゃあ、宇宙とか」放つ圧迫感・・・・?」

のどかが最悪の結果を示そうとしたとき

茶々丸が何が何反応する
と云ひながら「おが……茶々丸さん」

一人納得している茶々丸に、全員が首を捻っている。と、

「遅れん。安心してくださー。フロイドさんせ無事だやつです。」

「アハ、畏うつー」。フロイ

は今何処に？」

みんなの気持ちを代弁するネギ。だが返答は

「おれがおまえのことを語りへば解りやう。

みんなの声がハモリ、一同フリー^ズする。

おなじで無事、て分たる。」
思ひ出でる。」

「馬鹿か貴様等、先程茶々丸が言つていただろう。あなたはこの時の事も予想して・・・と、この事から、茶々丸への情報提供者は一人しか考えられまい。」

「正解だ。ぼーや。茶々丸メッセージをそのまま伝えてやれ。」

分かりましたマヌタリ 音声認定 超録音 フルセリシ再生開
フフツ、スザン、スギ芳二。昭 令語、二九。

が消えたということネ。ん?どうやつてこのメッセージを送つたか
力?それは私が転送つた衛星に探索指令が入つたら送る設定になつ

たネ。じゃあ本題に入るヨ。まず先に言うがフェイトは無事ヨ。安心するヨロシネ。そして一番みんなが知りたいのは、何処にいるかだが・・・、彼は今、異世界にいるヨ。

ハハハ。流石にこれは予想してなかたみたいね。

まあそれも当然で、帰ってきて来た「コード」の話だと、異世界の名前は
ハルケギニア。こちらと違つて、6000年もの時代が在るのに、
時代背景や、文化レベルはこちらの中世時代並みで、さりにあちら
では魔法の存在が一般的に知られてるらしくて、それが文化発展を
妨げてるらしいヨ? それで、向こうの魔法学校の使い魔召喚の儀式
に巻き込まれたらしいネ。まあ、ちゃんと帰つて来るから安心する
ヨロシネ。それじゃみんな・・・さよならネ。 プツンッ。
以上が超 鈴音からのメッセージです。」 「・・・超さん少し名
残惜しそうでしたね。」

「仕方ないと思つわよネギ。超さんだつて大変なんだろうから、アンタも沈んでどうすんのよ、アンタは元気にしてればいいのよ。」

「君のお姉さんやつは、しかしフェイト君も不運やな。……あつ、今思つたんやけど、フェイト君召喚した人、最強ちやう？」
「あ～確かに。」

ネギま! side out

四、惑つネギワールド（後書き）

まさかの超りんでした。

いやだつてですね。ハルケギニアのこと教えようと思つたら、これ
しか出できませんでしたから。えつ？才能無い？すいません、すい
ません。ああ、石投げないで、あと、アラアルババッジとか、魔法
空間と衛星の設定がご都合主義になつてますた。文才無い？すい
せん、なんか謝つてばっかになつてすいません あつあとこれから
期末が始まるので、更新は気分次第になりそうです。期末終わるま
でですが、書き貯めしてませんので。それではまたよろしくお願ひ
いたします。

短歌 出でたのは白髮美青年……（前書き）

短くてすいません。試験期間中と「う」ともあるのですが、すいません。さらに全く進んでいませんね。次話ではそれなりに進めたいです。といふか進めます。あと、オリジナル設定は説明が入っていますが、既存の設定、（ハルケギニアの事など）は少し省略してもよいのでしょうか？教えていただけるとありがとうございます。では本編をどうぞ！――

ゼロの使い魔

ルイズ S ide

さつきから私の心臓が私のじやなくなつたみたいに鳴り続ける。
落ち着いて、落ち着いて、私は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。偉大なヴァリエール公爵家の三女な
のよ。だから大丈夫、大丈夫。さつきから失敗し続けて周りが「成
功しないな、流石ゼロ。」とか、「ケホツ、ケホツあいつには無理
だから止めさせろーーー！」砂埃が舞うじやないか。」・・とか、「あ
らあら、留年決定かしらゼロは。」・・・とか！　落ち着けるか

いいわ、絶対に次であいつらが羨むような使い魔を召喚して見せるわ、それで見返してやるのよー。

「わが名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。世界の何処かに存在する。美しく、強い者よ、私の使い魔として召喚されなさいっ！！！」

ドッカーン！！

よしつ！！！、確かな手応えがあつたわ。いつもより爆発も大きいし、周りがうるさいけど砂煙の中にはちゃんと人影が・・・つて、あれ？人影つて？まさか私、人を召喚しちゃつた？

う、嘘よ！嘘よ！そんなはずないわ！！！けど、砂埃がはれてそこにいたのは、白髪の青年だつた。ありえない。人間を召喚するなんて、周りも「平民を召喚したつ！？」、「ルイズの奴使えない平民を召喚するなんて、流石ゼロ！！」とか言つてゐし、と、とりあえずアイツに確認しないと、

「あんた、誰？」

フェイト side

目の前にいるピンクの髪の持ち主は僕のことを知らないみたいだ。おかしい、あのタイミングで転移させられたから、大方敵の罠かと思つてたんだけど・・・名乗つてみるかな、魔法関係者なら僕の名前を知らないはずがないし。

『実は5年前の事件の犯人として魔法関係者にはかなり名前を知られている。』

「・・・フェイト・アーウェルンクス。」

「えっ！？」

驚かれた。じゃあ彼女は敵ではなく、此処は魔法世界かな？？いや。敵ではないと決めつけるには早計だね。一応警戒はしておこう。そんなことを考えていると、

てことは、貴族なの！！？

検討違いなことで驚かれた。・・・貴族？あり得ない、旧世界はもちろんのこと魔法世界にも王族や議員はいても貴族はいない。そんな制度は大昔に撤廃されたからね。

そして、ファミリーネームがあるだけで貴族扱い。

あり得ない。なら考えられることは・・・嫌だね、絶対に信じたくない候補が2つ位でてきたよ。

1つ目。時間跳躍をして、過去の時代に移動した。

ふざけてるようだけどネギ君達から超鈴音という人物について聞いているから、あり得ないことではない。

そして2つ目。こっちの方が信じたくない。・・・此処が異世界である可能性。根拠はいくつかある。

まず1つ目。僕の名前を知らない。魔法世界で生きる人間なら知らないはずがない。だつて僕の当時の目的、世界中の人々の抹殺だからね、事情を知らない人から見たら。今ではハイディライトウォーカーより悪人としての知名度が高いからね、彼女の代わりになまはげ扱いらしいし、彼女は笑つてたけど……話が逸れた。

2つ目。ファミリーームがあるだけで貴族に間違われるような制度が在るということ。というか、そもそも貴族がいるということだ。この時点で、最低でも僕がいた時代の世界ではない。3つ目。僕を転移。いや周りの人々の言葉を信じるなら、召喚した。魔方陣の起動を僕もネギ君も閑知出来なかつたこと。これでも僕とネギ君は世界最強クラスの力の持ち主だ。並大抵の術者の力量ではそんなことは不可能。ならば可能性は1つ、僕やネギ君が全く知らない魔法・術式体系の魔法である場合。それならば閑知出来ないのも当然。

今まで感じたことの無い気配に加え、僕の真後ろに出現。戦闘直後の注意しても起ころる気の緩み。術式自体に施されている認識阻害、気配遮断。これだけ材料が揃つているならあり得ることだね。

こんな発想ができる自分に嫌になる。こんなことを考えられるようになつたのはハルナさんに、漫画について一から叩き込まれたからだ。

状況判断の役にたつたとして喜ぶべきか、滅茶苦茶な考えが浮かぶようになつたと怒り哀しむべきか。

まあ、考え事はもういい、とりあえず情報を集めよう。まず目の前のピンク髪の子に聞くか。話しも途中だし。

『ここまで思考時間約10秒。はつきり。フュイト、恐ろしい子つ！』である。』

「いや。貴族ではないよ。それで君は？」

ルイズ side

なーんだ。貴族じゃないのね。家名持つてると。変ね。まあいいわ、問題なのは役にたたない平民無勢が私の使い魔として召喚されちゃつたことよー！

とりあえず先生にやり直しを要求したいわ。公爵家三女の高貴な私の使い魔が平民なんて許されないわー！！

「コルベール先生。あの、もう一度召喚させてください。」

side out

sideコルベール

今日は使い魔召喚の儀式です。皆さんちゃんと召喚出来ますね。

大変よろしい。まあそれが普通なのですが。最後に問題のミス・ヴァリエールですね。先程から何度も失敗しています。困りましたね、失敗もなんですが、いちいち爆発が起きるので砂埃がすごい舞いますし。・・・ああ今回は一際大きい爆発ですね。

おや？どうやら召喚出来たみたい・・・つつーーーーー？なんですか！

？このあり得ない程に巨大な魔力は！？しかもこれほどの魔力を持つてると、幻獣ではなく人ですか！？・・・あり得ない。この魔力はスクエアクラスのメイジ100人分以上は確実にあります！！。しかもその人に向かって、ミス・ヴァリエールが何か話しかけています。いけない。彼の魔力に敵意はありませんが、警戒の色はあります。下手に刺激してしまつたらここにいる全員が殺害されることもあります。下手に刺激してしまつたらここにいる全員が殺害されることもあり得ます。とりあえず彼らのもとに行かなくては・・・

「コルベール先生。あの、もう一度召喚させてください。
・・・とりあえず。彼に事情の説明と説得。彼女への説得をしなくてはいけませんね。」

五
出でたのは田嶋美青年……（後書き）

フェイト君頭良すぎですね。すいません。なにぶんパルに教え込まれている上に頭良いですし、フェイト君ならこの位推測しそうなんですね。

という、駄作者の独断と偏見により、フェイト君は異世界と、感づいてしまいました。すいません。こんな駄作者ですが、どうかよろしくお願ひいたします。

コンタラクトサーヴァント？ ふんっ。誰が？（前書き）

ようやく期末試験が終わりました。

これから更新速度は、少しはマシになる予定ですが、リアルが少し忙しくなるので、最初の更新速度は難しいかと思います。

前回進めたとかについて今回ようやくコンタラクトサーヴァントのイベント終わったぐらいですね・・・。本当にすいませんでした。

m () m

コンタラクトサーヴァント？ ふんっ。誰が？

フェイト side

僕の事は無視か、大物なのか？魔力は多いけど僕程じゃないし……。ただ単に、僕の実力も分からぬほど未熟なのか……。まあ後者だろうね。

見たところまだ幼いし、動きも隙だらけ、仕方ないんだろうね。しかし、無視をしないで欲しいな。僕は今、情報が欲しいからね、無視されるのが一番困る。

どうしたものか。……ん？ こっちに近づいてくる人がいるな。

彼は……頭が寂しいね、あと、明らかに場数を踏んでる。多分何

人か、いや最低でも100は殺してる。それぐらいに隙がない。

・・まあ一般人からしたらだけど。何か焦ってるな、僕の実力を見抜いたか？

・・・・いや、それはない。多分僕の異常な程の魔力量を感じ取れたらんだろうね。だから焦ってる。

さつきからピンク髪の子が無視してくれるから、周りでガヤガヤとうるさい話し声も貴重な情報だ。

話し声によると。

「ゼロのルイズが役にたたない、平民を召喚したぞ。」

や、

「使い魔が平民だなんて、ゼロのルイズにはお似合いね。」

などが多い。

この話からすると、使い魔召喚でもしていたのだろう。確かに、周

りの人達はカエルやら鳥やらさりにはバクベアーやバシリスクなどの幻獣までいる。

あと分かるのは、このピンク髪の子の名前がルイズであるだりつつてこと。

その前に付いている『ゼロ』については、渾名だりつ。

今、推測できるのはこの程度。あとは話を聞かなくちゃあわからない。

さあ、頭が寂しい彼が来たみたいだし、話を聞こう。

「ミスター。聞きたいことがあります。」

フュイト side out

コルベール side

「ミスター。聞きたいことがあります。」

召喚された白髪の青年が会話を求めてきた。よかつた。いきなり暴れだすようなことはしないみたいだ。会話が出来るのならば、まだ交渉の余地があります。彼程の力を持つた人が契約に応じてくれるかは分かりませんが、最悪の事態は避けられるかもしれません。とにかく、話を聞きましょう。

「ええ、ミスター。どんな話ですか？」

コルベール side out

フェイト side

「はい。まず、あなたには僕の力がわかつていますよね？」

「ええ、わかつてますよ。だから僕も、話に応じてます。」
つまり、僕が弱かったら話すらなく、強引に押し進めるつもりだったのか。「ではまず、此処は何処でしょうか？」

「此処はトリステイン王国の、トリステイン魔法学院ですが、それがなにか？」

「……これは異世界決定かな……？でも一応他の国のことでも聞こづ。

「……なるほど。では周辺諸国の名前を教えてください。」

「（）ハルケギニア大陸ですか？ 分かりました。まずは（）トリステイン王国。ゲルマニア帝国。ガリア王国。アルビオン王国。そしてロマニア皇国ですね。」

「……駄目だね。これは異世界決定だね。似たような名前の国は過去の地球にもあつたけど、ハルケギニア大陸なんて名前の大陸はなかつたし。
・・・仕方ない。（）は彼らの最高責任者に事情説明をしないと駄目だね。

「では、あなた方の最高責任者に会わせてください。その方に事情を説明いたしますので。」

それしかない。そう思つて言つた時。

「待ちなさいよ……」今まで視界に入れてなかつたピンク髪の子が怒鳴つた。

フェイド side out

ルイズ

した白頭！！さつきから目の前にいる私を無視して…！

私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。誇り高き公爵家の三女なのよ…！

そんな私を貴族でもない平民がましてや、使い魔として召喚されたくせに無視するなんて、信じられない…！！

しかもいきなり最高責任者に会わせろだなんてあんた何様なのよー！！

もう許さない。こうなつたら、完全に使い魔にして、言ひこと聞かせてやるわ。

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与える、我が使い魔となせ。」

呪文を詠唱してたら、コルベール先生がなにか騒いでいたけど。なによ。ただの平民じゃない。そんなにならなくてもいいでしょ。そして、私が白頭にキスをしようとして…・・・・・避けられた。なんですよ…！？

貴族とキスなんて絶対に出来ないのに、それを避けるですって…！？なに避けてんのよ…！

そう叫ぼうとした声が固まつた。

・・・いや、意識が固まつた・・・・・。

白髪の青年の、目が。

私を射抜いて、凍りつかせた。

フェイト side

今の魔法。

完全ではなかつたけど、洗脳の効果があつた・・・。詠唱にあつた、『使い魔となせ。』という言葉。

なるほど。使い魔が歯向かつようでは、使い魔とは言えない。だからこそ、洗脳。

主人に従順。そうでなくとも、絶対に裏切らない。そうさせないための洗脳か。確かに普通の使い魔なら、してもおかしくないし、むしろ、しないと駄目だけど・・・。

人間にすることじやがないね・・・。

さつきはいきなりだつたからつい反射で少し殺氣を飛ばしちゃつたから、ピンク髪の子が固まつてゐるね。

・・・まあいい。

確かに、魔法学院の生徒に殺氣を飛ばしたのは、まあいし、悪印象だけど。

いきなり使い魔にしようとした、学院側に非があるからいいか。

「では、ミスター。参りましょうか。」

コルベール side

やはり、彼は危険です。

使い魔にされるのが嫌なのは分かりますし、避けるのも分かります。ですが、彼は反射で避けるだけではなく、同時に殺氣まで飛ばしていました。

・・・・あの程度が、本気ではないでしょうが、反射でそこまでするほど、戦いには慣れているのでしょう。

・・・・嫌ですね。彼は青年に見えるが、私から見ればまだ子供。まだ、味方でも親しくもないというのに・・・死に慣れて欲しくない。

・・・所詮、私のエゴですね。彼からすれば余計なお節介でしょうね。

・・・・駄目ですね。

今は、感傷的になつてゐる場合ではありません。

早く指示を出さなくては。

「では、皆さん。これから的时间は使い魔との親交を深める時間とするので、授業はありません。では、皆さん。解散してください。」

「では、ミスターと、ミス・ヴァリエール。学院長室に向かいましょう。」

コルベール side out

side in introduce

「ふむ。なるほど。そちらの事情はわかつた。」

「……は、学院長室。
使い魔召喚を遠見の魔法すでに見ていたオーレルド・オスマンは、
部屋にやってきた。フェイトの話を聞き、納得はしたが、困惑し、
参っていた。

フェイトからの要求は、今すぐもとの場所に還すこと。
だが、サモン・サーヴァントは片道のみの魔法。

彼が居た場所はおろか、彼の世界に還すことすら不可能なのだ。
さらに、フェイトが強すぎるのが問題であった。

フェイトは強すぎる。

それこそ国の全戦力を使つても、まだフェイトの方に分があった。
そんな規格外も良いところの強さを持つ、フェイトに君を還すこと
は出来ないとは言い難かった。

だが、それも。

「その、反応から察するに、僕を今すぐ還すことは出来ないみたい
だね。」

フェイトが優秀過ぎるゆえすべぐに、見抜かれてしまった。

オスマンは慌てた。

フェイトが怒つて暴れたらどうしようもないからだ。だが、オスマ
ンの危惧も杞憂に過ぎず、
フェイトは一つ大きくため息をつくと、

「慌てなくていいです。安心してください。僕は暴れるつもりも
ありませんので。」

疲れたように、言った。

その様子を見て、オスマンはフェイトの言葉に嘘がないのを感じ取つた。何故なら、フェイトの態度に疲れと諦めが滲んでいるからである。

フェイトは、こいつ思つていた。帰ることの出来る可能性はほとんどゼロであるだらう、と。

フェイトが帰るのには、最低でも、世界を渡る力が要る。そんな力は強大すぎてまずありえない。特にこの世界では。

ここにいるメイジの最高クラスの一人であろうオールド・オスマンの実力は、フェイトの目算であつたが、おそらく、フェイトの世界のランクでA程度。

マギアエレベア修得前のネギより、弱いだらう。

だから、フェイトは帰ることを半ば諦めている。が、諦めきる事はできない。

だから、オスマンに要求した。

「その代わりに、要求があります。まず一つ目、僕にまともな衣食住を提供する事。二つ目、僕が帰る方法を探す事。そして、三つ目、僕を形式だけの使い魔にする事。最低でもこの三つは保証して欲しいね。」

オールド・オスマンは安堵していた。

要求の衣食住はたいした問題ではないし、帰る方法の探索も、見つかるかどうかは分からぬが、探索だけなら出来る。最後のは、むしろ願つてもないことだった。

おそらく、エルフ並みか、それ以上の力を持った者を形式だけだが、ミス・ヴァリエールの使い魔という形で抑えておけるからだ。

「ふむ。わかつた。衣食住の保証は元々使い魔に保証される物じやし、帰るための方法の搜索もやろう。最後の形式だけの使い魔契約容認しよう。ミス・ヴァリエールも、コンタラクトサーヴァントを

しなくとも進級を学院長のおこで容認する。」

オスマンはフェイドの顔色を伺いつつ、これでよいかな？と確認する。

「ええ、十分です。先の要求が守られる限り、僕は彼女の使い魔。ところが」と。

フェイドもそれで構わないと首を縦に振る。

オスマンはルイズにも構わないと確認し、ルイズはさつきのフェイドの殺氣がまだ効いているのか、黙つてじくじくと頷いた。

「ノンタラクトサーヴァント？ ふんっ。誰が？（後書き）

強さの方は作者の独断と偏見と田分量で出来ていますので、読者の
方の意見と違っていたら「めんなさい。

異なる物（前書き）

「――――」

すいませんでした――――。

あり得ぬ程更新が遅れ、しかも文量が、少ない。
なにやつてたかですか？

高校の課題とハリポタの見直しとこの頃リリカルな世界にはまつた
事です。

すいません。読者の皆さんには大変失礼しました。
これからはもつと改善するつ「もう、遅いよ。
つてフェイト君！？」

僕の前書きはそういう「――――じや――黙れ。」はい――

「読者への迷惑と僕への迷惑を考慮してお仕置きするから黙つてで。

」

今僕を強調したね！――？

「・・・・・ヴィシュ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト　『永久・
・・・

ちよつ！！！永久石化！！！！！

死ぬつ死ぬ助け・・

「・・・石化』

「・・・パチンツ・・・

「駄（墮）作者には制裁を、ああ、大丈夫です。一応作者ですから

次回までには治りますから。・・・多分、おそらく、きっと。こんな、駄作者だけど、出来れば見捨ててやらないでね。お願いします。」

異なる物

ルイズ side

変なことになつたわ。

れたとかいつてるし。

私の呼んだ使い魔は異世界から呼び出され
いきなり最高責任者に会わせるとか言う
何故か私の部屋で寛いでる
し！！

なのよー！！！

「あんた一体何なのよーーー！」

ルイズ side out

フェイト side

僕を召喚したピンク髪の子の部屋に着いた。

ようやく休める。

さつきまで此処の最高責任者やコルベールとか言つ教師に自分の事を話したり、ハルケギニアについて聞いたりしたから疲れた。

そして、何より問題なのが・・・。

ルイズ。

僕の形式だけの主人になつた僕をこんな厄介事に巻き

込んだピンク髪の女の子。

彼女への感想を言つならこれに尽きる。

『権力という質の悪い玩具を手に入れた

愚かな餓鬼』

何故なら、まず彼女は、僕の力に全く気づいていない。

本来僕程レベルの違う者に会つたらすぐ
に気づくはずなのに気づいていない。

この時点では彼女はレベルが低い。

とはいえ、あの草原で僕の力がわかつた
のは一人しかいなかつたけど。

一人はミスター・コルベール。

そしてもう一人は、蒼い髪をした少女だ。
だから、この学院の生徒達は相当レベル
が低いんだろう。

だけど、僕を異世界から召喚したピンク
髪の少女。

そして、このルイズって子は、人間とし
て駄目だ。

彼女は自分を偉大なる公爵家三女だと言
つていた。

や一部の重鎮以外の貴族より位が高い。
だから彼女は事あるごとに、

『私は公爵家三女なのよ』とか、
『平民は貴族の言うこと聞いてればいいのよ』とか、

『平民の幸せは貴族に仕えることなのよ』

などと眞面目に言つてるからね。
ああ、そんなことを眞面目に言つぐらい
此処の貴族の教育は酷いのか。

集めたような世界。

・・・
・・・
・・・

価は最悪。

は少しは面倒みてあげてもいいけど。

あまり気は進まないね。

そんなことを考へていると。

「あんた一体何なのよ！！」

さつきまで黙っていたピンク髪の少女が僕に叫んできた。

「何を言つてゐるんだい？ルイズ・フランソワーズ。僕の説明なら
学院長室で話したけど。」

と、既に知っている筈の事を聞いてくる彼女に、何を言っているんだ？

・・・つて返したら。

「あんたが学院長室で話した、違う世界、ましてや貴族のいない世界から来た。なんて、信じられるわけないでしょー！」

そう呼ばれた。

「ふう・・・、信じられない、ね。それはほんちのセリフだよ。ルイズ・フランソワーズ。」

「なんでよー?」

喧しい。

「いちいち叫ばないでくれ、喧しい。第一今は夜だ。周りの部屋の人に迷惑だらう。」

「なつ！？ あ、あんた私はあんたのご主人様なのよ。なのに喧しいですって！ ふざけんじやないわよ！！」

・・・・ああ、まさかここまで駄目だったとは。

予測はしてたけど、こんなのが主人とは・・・。

まあいい。とりあえずこの愚か者に立場を教えてあげようか。

「ふざける？ 馬鹿を言つなよ、ルイズ・フランソワーズ。まず君は自分が主人だから従えと言つてはいるが、僕は形式で使い魔をしているだけで、君を主人だなどとは思つていない。」

「なつ！？」

「それと、喧しいのは厳然たる事実だ。僕は注意をしているだけで、あつて、君の怒りはただの逆ギレだ。君みたいな子供が主人とは、全く嫌気が差すね。」

「な、ななな、なんですかー！？ あんた「それが喧しいと言つてはいるんだ。ルイズ・フランソワーズ。もう君とのやり取りは疲れたよ。僕はもう寝る。で、僕は何処で寝ればいい？」

「ふんつ。そーよ。」

指を指された方を見ると床に藁が敷いてあった。

・・・・嘗めているのか？僕は条件にまともな衣食住を要求したといつのに、床に藁とは。

まあいい。また揉めるのは正直面倒。

だからといって、床に寝る気はさらさら無いけど。

「君には、ほとほと呆れるね。生憎僕には床で寝る趣味は無いから、椅子で眠る事にしよう。」

そつと、僕は椅子に腰かけた。

戦場だと野宿が基本だから、ある程度なら悪条件下でも寝れる。

そして、腰かけた時に不意に窓の外を見た。

僕は一瞬息が止まった。

僕は窓からある一 点を凝視している。

ありえない、だけど此処は異世界。誰かの言葉の通り、ありえない事はありえないのだろう。

視線の先に在るのは満月。丸い、丸い一つ（・・）の
双月だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1412m/>

ゼロの使い魔は3番目

2010年10月31日01時31分発行